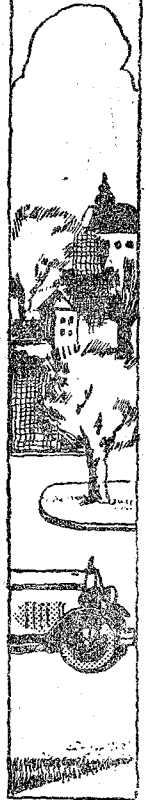


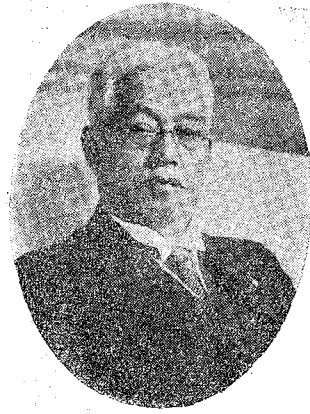
説苑



歴代内務土木局長と其時代 (八)

—小橋 一太 氏—

清 水 生



今は既に故人となつてゐる。

小橋一太氏も在

世當時は官界に

政黨界に亦政治

家として相當世

間では知られて

ゐた人物であつた。この小橋氏が土木局長になつたのは、

下岡忠治氏が大隈内閣の下に大隈首相が内相兼攝の際内務次官で土木局長心得をしてゐた。大正三年四月廿八日に土

木局長心得を解かれて内務次官專任となつたと同時に小橋

氏がその跡を襲ふて地方局長から土木局長に轉じてゐる。

そうして氏は土木局長としては大隈内閣の下に大隈兼攝、

大浦兼武、一木喜徳郎氏等の三内相に仕へ、更に寺内内閣

の下に後藤内相に仕へてゐたが、水野鍊太郎氏が後藤伯

の外相に轉ずると共に次官から内務大臣に親任せらるゝと

説苑

氏は小橋氏を抜いて内務次官にしたのは大正七年四月廿五日であるから、小橋氏の土木局長在職は四ヶ年の永きに亘つてゐる。氏の土木局長當時に於ける内務首脳部を見ると、先づ大隈内閣では大隈兼攝内相、大浦兼武氏、一木喜徳郎男と内相は三度變はり、次官は下岡忠治氏と久保田清周氏と二度變つてゐる。地方局長は渡邊勝三郎氏、警保局長は安河内麻吉氏、神社局長は斯波淳六郎氏、衛生局長は中川望氏の顔觸れである。大隈内閣は彼の有名な大浦事件で世上に物議騒然として重大問題を惹起したるにも拘らず、尙依然として居坐つてゐたが、遂にこれが間接的動機となつて大正五年十月に瓦解したのである。この跡に出來た内閣は寺内正毅伯を首相とする即ち寺内内閣であつた。

この内閣には後藤新平伯が内務大臣となつたので、水野鍊太郎氏が次官となり、小橋氏はその下にやはり土木局長に在職してゐた。寺内内閣の下に當時の内務首脳部は後藤内相の下に水野氏の次官、添田敬一郎氏の地方局長、永田秀次郎氏の警保局長、塚本清治氏の神社局長、杉山四五郎

氏の衛生局長といふやうな顔觸れであつたが、小橋氏は寺内内閣の後半に於て後藤伯の外務大臣轉任に伴ふ水野鍊太郎氏が次官から内相に親任されたので、水野氏に依つて内務次官に拔擢されてゐる。(本誌第二十二卷第八號に掲載の内務土木局長と其時代水野鍊太郎氏傳中五十二、三兩頁参照)これが大正七年四月廿五日であるから、氏の土木局長在職は前にも一寸書いたやうに、丁度滿四ヶ年に僅か三日缺けてゐるのである。例に依つてこゝで氏の略歴を書いて置く。

小橋一太氏は舊肥後熊本藩の藩士、小橋元雄氏の長男として明治三年十月一日に熊本市追廻田畑町に生れてゐる。元來氏の尊父元雄氏は肥後藩士で松雪と號して藩費時習館に學び、夙に尊王の大義を唱へ幕末時代には常に京阪間を往來して諸藩の勤王の士と交りてゐたが、明治元年征討軍に従つて東海道先鋒組の肥後藩本陣付勤務となつて大に活躍する所があつたやうである。明治四年廣澤參議暗殺の嫌疑を受けて熊本藩邸に禁錮されてゐたが、間もなくその嫌疑が霽れて自由の身となつた。明治

七年に江藤新平氏の佐賀の亂、明治九年敬神黨の事變には熊本縣廳の囑託を受けて藩士鎮撫に盡力してゐる。明治十二年に熊本縣阿蘇郡長に任ぜられたのを振出しに山鹿、菊地、合志、八代、葦北の縣下各郡の郡長を歴任して大に治績を擧げてゐる。後ち藩主から肥後藩國事史料編纂委員及び内閣から維新史料編纂委員を命ぜられてゐたが大正三年十一月一日に年七十五歳を以て歿してゐる。

小橋氏はこのやうな人を父として生れてゐるが、幼年時代は熊本に育ち熊本中學、第五高等學校を経て明治三十一年東京帝國大學英法科を卒業してゐる。氏は尤も順序から行けば帝大卒業は廿九年であつたのであるが、病氣にて中途郷里に歸省して約二ケ年程靜養してゐたために自然大學の卒業は卅一年に遅れたのであると常に氏は語つてゐた。兎も角帝大卒業後内務省縣治局に奉職してゐたが、間もなく山口縣參事官に轉任してゐる。この時の山口縣知事は有名な民選議院設立建白書を起草した古澤滋氏であつた。其後本省に歸つて、内務省書記官、内

務省參事官を経て文書課長となり、更に地方、土木、衛生の各局長を歴任してゐる。又氏はまだ土木局長にならない以前土木局に書記官であつた頃に犬塚勝太郎氏が土木局長であつて、その犬塚氏の推選によつて萬國道路會議に出席のために歐米視察を仰付られて先づ歐洲に赴いたが、佛蘭西に於て病氣となつて中途歸朝してゐる。更に前記の如く大正七年には寺内内閣で水野内相の下に内務次官となり、次いで原内閣で床次竹二郎氏が内務大臣となるに及んでも亦氏は次官に懇望されて留任してゐる。大正十一年次官を辭して郷里熊本市から衆議院議員に立候補して當選して以來、政黨界に身を投じて政友會政務調査會長、院內總務等に推されてゐる。大正十三年清浦内閣の成立に際しては特に親任官待遇の内閣書記官長となつたが、清浦内閣は全國に渦巻く憲政擁護への濤浪に押れて間もなく倒壊するや、氏も亦共に去つて政友本黨の總務として床次總裁を扶けて居たが後政友本黨が憲政會と合同して民政黨を組織するに當つて氏も亦民政黨

に入り、最高幹部の地位に付いた。昭和四年民政黨總裁濱口雄幸氏に組閣大命降下されて、世の所謂濱口内閣が成立すると、氏は文部大臣として臺閣に登つたのであつたが、偶々越後私鐵事件に連坐して辭職するの止むなきに至り、僅かに在職四ヶ月にして昭和四年十一月に文部大臣を辭したのであつた。この間全國神職會會長、大日本社會事業協會理事、恩賜財團濟生會、日本青年會等の評議員ともなり、亦民政黨院外團長ともなつたこともあつた。昭和十二年東京市長に選舉せられて就任したが病を得て十四年六月辭任し専ら相州茅ヶ崎の別荘にて靜養中なりしが、同年十月二日午前三時三十分に遂に逝去したのである。特旨を以て正三位勳一等に叙せられてゐる。氏は秀子夫人との間に四男一女あつて、長男一雄氏は東北大學を出身後三井生命會社に入り現に神戸支店長として勤務してゐる。

これが氏の略歴ともいふべきものである。而して氏の土木局長の時代になしたものは先づ第一に災害土木費の國庫補

助に付いて調査研究審議の上その規定を制定してゐる。更に多年土木局内の懸案であつた關東の荒川下流及東北地方の北上川改修工事の起工は、氏が土木局長在職時代に行つてゐる。亦土木局が直轄工事として多年に互つて施行しつゝあつた淀川の改良工事と九頭龍川の改修工事の内本川及支川足羽川筋の改修工事は終了してゐる。更に多年同地方官民の要望であつた秋田の船川港の修築工事も、亦仙臺鹽釜港の修築工事も、氏が土木局長の時代に國庫補助港として起工してゐる。その外にも新潟港は最初市に於て改修工事を起工したが夫れを縣に於て繼承して着手してゐたのを大正六年度から改めて國庫補助港として起工したのも氏の土木局長の時代である。先づ大體小橋氏が土木局長時代になしたことは大略このやうなものであるが、夫れから今日では最早や東京市の外郊とは云へないが、當時は東京市の外郊といつても取て差支へないと思ふ品川を起點として惠美須、五反田、目黒、澁谷等を縫ひ新宿、池袋、巢鴨、王子に出で夫れから本所の三河島方面に入る所謂環狀道路

線の計畫に付て、氏は當時の計畫狀況と調査の模様等を嘗て筆者に話されたことがある。この話は筆者は氏と自動車に同乗して今は立派に出來上つてゐる環狀道路の上を走つてゐた際であると記憶するが、その時の氏の話しに

余は土木局長時代に英國の駐日大使から外務省を通じて余の許に青森迄自動車で旅行したいから道路の關係はどうであらうかと問ひ合せて來たことがあつた。夫れで早速調査させて見ると、遺憾ながら東京から青森迄は愚か仙臺までも自動車で行くことは出來ない。當時我國の道路はかゝる状態であつたのである。遺憾ではあつたけれども仕方なくその旨を外務省を通じて英國大使に答へて置いた。なんでもその後間もなく某俱樂部で偶然英國大使と出會つた際に、英國大使は余に對して將來自動車の發達は益々盛んになり従つて重要な交通は勿論運送機關ともなると思ふ。従つて道路の設備擴張は御國の尤も大切な仕事の一つではないでしやうかと云はれたので非常に胸にこたへたのであつた。勿論道路の重要なこと

位は判つてはゐるが、外國人から云はれると一層強く頭に響くものじや。夫れで余は青森から下關に至る迄即ち我國本土を一貫した主要道路を一日も早く作り上げるこゝとが一國の産業發達上にも又交通上にも必要なことと考へたので、時の内務大臣であつた後藤伯や水野次官に建議提案して一步々々つづ實現するやうに努力した。今この上を走つてゐる環狀道路もその一つであり、亦京濱間の國道、阪神間の國道等々も實現されてゐる。將來はこれ等を繼ぎ合せて立派なる一貫道路が出來る譯である。余はその當時この環狀道路計畫の豫定線を實地視察するために品川から目黒を経て東京市の外郊を見て歩いたことがある。當時はとても自動車などでは通れず人力車さへも通る所は少なく、草を分け木の根を踏んで脚絆掛けで歩いたものであつた云々。

と當時環狀線道路計畫の回顧談を同乗の車中で話されたことをである。この環狀線道路計畫の芽生へは確かに後藤伯が嘗て鐵道院總裁を兼務してゐた時に、獨逸の技師を招い

て今日の山の手電鐵環狀線の布設計畫をなさしめたと同じ意義の下に後藤伯、水野鍊太郎氏、小橋一太氏等の合作計畫によるものであると思はれる。

元來土木局の仕事、換言すれば土木行政——事業は港灣であれ、治水であれ、河川改修であれ、道路であれ、何一つとして一國の發展上に至大の關係を持ち、その重要な役割を演ずることは云ふ迄もない。近衛首相が強力國家組織を力説した所謂新體制の聲明中にその劈頭に於て、

「今や我國は世界的大動亂の渦中に於て東亞新秩序の建設といふ未曾有の大事業に邁進しつゝある。この秋に當り世界情勢に即應しつゝ能く支那事變の處理を完遂すると共に、進んで世界新秩序の建設に指導的役割を果す爲には國家國民の總力を最高度に發揮して、この大事業に集中し如何なる事態が発生するも獨自の立場に於て迅速果敢且有效適切に之を對所し得るやう高度國防國家の體制を整へねばならぬ。而して高度國防國家の基礎は強力なる國內體制にあるのであつて、こゝに政治、經濟、教

育、文化等有ゆる國家國民生活の領域に於ける新體制確立が要請があるのである云々。

と云つてゐるが、これは畢竟富國強兵策である。土木局の仕事は一國の諸産業發展上に於て亦國防的見地上からでも或は食料問題の上からでも港灣、治水、河川、改修、道路等の施設改善は取も直さず富國強兵の一大政策である。就中道路問題の如きは直接その施設の如何は一國の産業發展上に影響する所は甚大である。彼のノモンハンを中心とする大沙漠地帯は、或る時代に於ては、大軍の作戦は不可能ではないかとさへ考へられた程物資に乏しい交通の不便の地方であつたが、それにも拘らず蘇軍が相當の大軍を動かし、その補給もどうやら満足にやつてのけたやうに思はるゝのは、外蒙の首都庫倫から七百軒サバイカルの根據地チタから六百軒のこの長い道中を悉く自動車に依つて、兵員、爆藥、糧食等戰場の必要品を送つたのであるが、これには道路が必要である。この長距離輸送も勿論自動車といふ機械力には依るけれども、例へあのやうな荒漠たる沙漠地帯で

はあるが、不完全ながらも道路の力にも依らねば輸送は絶對に不可能である。亦最近の外電に依るも蘇聯は南進政策の動脈として蘇聯政府は去る五月十五日以來ダヂキスタンの首府スターリナバツドからバミール高原の南麓標度三千三百米のハブラハーテ峠を経てアフガニスタンとの國境都市ホログに至る道路を建設中であつたが此程完成したと傳はつてゐる。露紙ブラウダはこの道路は延長五百六十軒建設には二萬二千人の勞働者と六千噸の建設資材を要した戰略道路であつて、スターリン道路と名付けられるゝことになつてゐるが、この道路の終點たるホログからはアフガニスタン領バダクシヤン地方の首都フアイザバツトに通じ、更に又印度のカシミールにも近く經濟上、軍事上この道路の持つ重要性は頗る偉大なものであると傳へてゐる。筆者は映畫で獨逸國內の道路状態を見たことがあるが、實に完備してゐる。米國が目下計畫中であると云ふ彼の國內南北兩基幹線と云ひ、道路政策は國の内外を問わず益々重要性が加つて來る。殊に高度國防國家の建設には道路問題を等閑

に附する譯には行ない。茲に於て我が土木政策の重要性につきては一層國民の認識を望む次第である。偕て筆の動きやうによつて聊か脱線したか、小橋氏が多年の官界生活を止めて郷里熊本縣第一區から衆議院議員に立候補したのは原内閣當時の大正九年であつた。當時小橋氏は床次内相の下に内務次官の要職にあつたが、原内閣は例の普選問題で一舉反對黨たる憲政會を粉碎するために突如として衆議院の解散を斷行したのであつた。この當時首相の原敬氏は床次内相と共に郷里熊本市から政友會の公認候補として出馬を氏に慫慂したのであつた。當時の熊本縣下に於ける政黨の勢力消長及其の状況は茲に書くのは省略するが、熊本縣は市郡を問わず彼の佐々友房氏以來、國權黨と稱して鍊へ上げた地盤は安達謙藏氏に依つて統率されて憲政會に取つては全國中無比の強固なる地盤であつた。嘗て小橋氏の以前縣下政友會の元老として檀浦知事の名を以つて有名な宗像政氏の方を以てしても、熊本市に於て憲政會の山田珠一氏に一とたまりもなく敗れたことがある。當時政友會の宗

像政氏と憲政會の山田珠一氏との大刀打ちが熊本市を中心として鎬を削つて戦かつたことは選舉界の話題であつた。

當時山田珠一氏が本部選舉長の安達謙藏氏に「ローマ帝國は一日にして成らず安心せよ」と打電したのも亦有名な話ではある。斯様に反對黨の絶對優勢なる地盤に於て小橋氏は愈々決心して内務次官の榮職も打捨て、立候補したのであつた。小橋氏の相手もやはり落選したことのない山田珠一氏であつた。これ亦全國未曾有の選舉戦を展開したが遂に多年金城鐵壁と頼んだ憲政會唯一の強固なる地盤である熊本市も遂に政友會の勢力の傘下となつて榮冠は遂に小橋氏に歸したのであつた。當時氏の熊本市否な全縣下に於ける人氣は實にすばらしいものであつた。選舉區に於ける青年は勿論老若男女を問わず寄合ふと「今度の選舉には是非共小橋さんを勝たしたいものじや」と皆は口々に話合ふてゐた程であつた。これには勿論政友會といふ大きな政治團體の背景もあり、亦當時は政友會が政權を掌握してゐたから與黨としてその羽振りもよかつたのにも依るが、殊に

氏が内務次官の顯職を捨て、立候補した關係もあつて、兎も角國權黨の多年築き上げた強固な地盤を一舉に打破つて絶對多數で當選したことは氏の人格の然らしむる所であつた。

小橋氏はこれから多年の官界生活をやめて黨人として政黨生活に入るやうになつたのである。そうして熊本政友會の重鎮江藤哲藏氏の亡き跡を受け繼いで熊本縣の政友會を率ひいて政友會に重きをなしてゐた。然るに一代の傑物原敬氏が東京驛頭にて倒れてから政局は高橋是清、加藤友三郎、山本權兵衛三内閣を経て組閣の大命は熊本縣出身の大先輩たる清浦奎吾氏に降下された。當時世上は清浦内閣を以て憲政に戻る官僚内閣なりとの理由の下に政友憲政聯合の下に憲政擁護の運動を起して全國の津々浦々迄清浦内閣反對の氣勢が盛んであつたのである。當時氏の所屬する政友會は清浦内閣を擁護すべしとの意見と憲政會と提携して即時倒閣に邁進すべしとの主唱と二派に分れて議論囂々となり遂に床次、中橋、山本氏等の一派は政友會を脱して政友

本黨を組織したのであつた。この前後に於て氏は清浦子の懇請に依つて郷土の先輩を援くべく斷然意を決して政友會を脱黨して清浦内閣の親任待遇の内閣書記官長に就任したのであつた。然し清浦内閣は議會に於て政憲聯合軍絶對多數の信任案上程と共に即時解散をしたが、總選舉後に於ても議會の形勢は依然として政憲聯合軍が多數であつた爲めに僅かに五ヶ月足らずして瓦解して仕舞つたのである。

從て氏も亦内閣書記官長の職を退き野にあつて政友本黨に所屬して床次總裁を援助して、或る時は總務として又は幹事長として相當活躍したのであつた。其後政友本黨が憲政會と合併するに至つて氏も亦憲政會に入り最高幹部地位に着いたが、間もなく床次氏一派が元の政友會に復歸するに當つて氏は床次氏と深き關係上余程煩慮したやうであつた。當時氏は床次氏について政友會に戻ろうか憲政會に留まるかに付て周圍の意見を忌憚なく求めたことがあつた。夫れで上大崎の氏の邸に集まるものは代議士大藤唯男、元代議士池田泰親、元熊本政友會幹事九州新聞主筆伴熊太其他數

氏であつた。筆者も亦氏に呼ばれてその席に参加した。席上何人も小橋氏と床次氏との深き關係を熟知するから皆々沈鬱の状態で一言も發するものがなかつた。茲に於て筆者は、

先生と「小橋氏のこと」床次先生の關係は私も常々から克く承知はしてゐます。世間でも亦床次氏あつて小橋氏、小橋氏あつて床次氏と噂されてゐる位です。斯様の次第であるから政友會から本黨に更に憲政會と三度も床次氏に付て行かれたのに亦々黨籍を變られて床次氏に付いて政友會に復歸さるゝのは先生としては余程苦しい御立場とは考へられますが然し私は政黨の理由とも云ふものは如何様にも付けられるし、亦見方にも依るのであるから此際は斷然床次氏と終始を共にするため床次氏と政友會に復歸されたら如何ですか。

と床次氏と同一行動に出づべき意見を吐露したのであつた。次いで大藤氏は、

政黨界のことは左様に簡單には行かぬ。若し先生が、(小橋氏のこと)強いて床次氏と行動を一つにして政友會

に復歸さるゝなれば自分は之れ迄先生には多大の御恩願を蒙つてゐるが、此際斷然代議士をやめて次の選舉には改めて憲政會から立候補して出る決心である云々。

と小橋氏が床次氏と行動を共にして政友會に復歸するの絶對反對論を極力主唱したものであつた。引繼ぎ伴氏外數名も亦設令小橋氏と床次氏との關係はいか様にあらうとも公人としての態度は別であるから小橋氏の憲政會殘留を説いたのであつた。席上當の小橋氏は何れとも何等自己の意見を吐露せず非常に熟慮してゐたやうであつたが、其後數日の後ち筆者も大麻唯男、池田泰親、伴熊太氏等數名と芝公園内の一料亭南州庵に招かれて小橋氏から熟慮の上「過日の諸君の意見は余に取つては大に参考になつた。余は私的關係は別として公人として今回は床次氏に付いて行かぬことにきめた」と話されたのであつた。當時筆者は床次氏にも多大の恩願を蒙つてゐたが、或る時床次氏に他用で招かれて麻布三河臺なる氏の自邸二階奥の角の書齋で御目にかゝつた時、床次氏は政治界のことは是で見様に依つて違ふ

ものである。小橋君や添田君は元々政友會であつたから自分と行動を共にしてくれるものと信じてゐた」と漏らされたことを今尙記憶してゐる。

當時の政黨界は政友會、政友本黨、憲政會と丁度新體制で解散前の政黨界に克く似てゐる三派鼎立の状態であつて、三派の幹事長は政友會では鳩山一郎氏、政友本黨では小橋一太氏、憲政會では横山勝太郎氏であつた。筆者は當時「三黨の幹事長と題して」當時の某新聞紙上に書いた事がある。偶然其の新聞の切抜きが発見されたから小橋氏の所だけ多少省略して掲げて見る、

「政友本黨幹事長小橋一太君と題して——由來役人上りは何所か官僚臭味と云ふのか、一種の役人氣質のあるものである。それを脱却せざる爲め役人上りの政黨入りは特定の數人を除くの外、政黨政治家に將又偉大なる政治家として成功しないものである。然るに君は大學卒業以來殆んどその大半は世の所謂官僚畑けに育つたにも拘らず、一度桂冠して政黨界に身を投ずるや直ちに政黨員の

心理を理解し有象無象の政黨政治家を後へに堂若たらしめ、一頭地を抜きて曾ては天下の大政黨たる政友會の院内總務〓政務調査會長〓等の要職を占め、亦主義主張に依つて政友本黨に入るや本部總務〓幹事長と總て多年政黨に多大の經驗を積む者を追ひ越して常に黨の中樞にあるは抑も何故ぞ、即ち君は政黨に最も不必要なる官僚臭味の毫末もないのと共に政黨に最必要なる犧牲的精神に富んで居る結果である。勿論君は學殖〓行政の經驗〓手腕〓力量〓人格等は人に優つてゐるのであるが、更に人の世話なれば自己を空しくしてそれを爲す事が君の人望の多大な以所である。

現に君は這般、床次總裁よりは非共幹事長の職を引受けて貰いたいと懇請された時、君の周圍の人々には幹事長は總務の低位にあり一度總務たる者は幹事長は拒絶するに如すと君に進言したるに、君は幹事長でも幹事でも又小使でも〓國家の爲め黨の爲めなら引受けるに躊躇しないとして、その職の如何上下に拘泥せず、あの本黨〓難

局を引受けたるが如き、君ならではの出来ぬ藝當である。此の犧牲的精神之れ有るがため益々君を大になす所以である。」

小橋氏は曾て筆者に對してこんなことを語つたことがある。

「實際現在の政黨の状態では困つたものだ。國民が如何に信賴しやうと思つても信賴が出来なくなるのに無理からぬ所だ。眞に黨弊打破は緊急の問題である。實業同志會の武藤氏の叫ぶ政治更新運動なども最も有効なものと考えへる。我黨との更新聯盟の成立も此際何とかして黨弊を打破して國民と共に進まんと欲する意に外ならぬ。公人が金錢に依つて其節を曲げてはならぬこと、黨費を公開する事及選舉方法を改正して例へば選舉ブローカーの出現防壓の如きは必要である云々。」

斯様に氏は常々黨弊の打破に付ては深く考へてゐるやうであつた。

元來氏の郷里熊本縣は全國に於ても名高い黨争の激烈な

所であつて、これを大體に云へば往昔津田靜一、木村鶴雄氏等から佐々友房氏に至る朱子學派の流を汲む保守派が紫漢會、國權黨、同志會、憲政會、民政黨の系統を保ち他方宮崎八郎、池松豐記氏等の急進派に彼の有名なる横井小楠氏と陽明學派の流を汲む漸進派とも稱すべき實學黨が自由黨となり政友會と變つたのであつて、總て縣民は何れかの政黨に屬して相互に鎗を削つて相争ふたのである。會て筆者の聞く所に依れば往年は政黨の立場を異にしてゐる所へは娘を嫁にやらぬと迄激烈な黨争のあつた箇所もあつたさうである。而して氏の尊父元雄氏は永らく縣廳の官吏生活をしてゐたからあまり確然と何れの政派に屬してゐたといふ譯けではないが、先づ國權黨側に近かいやうであつた。然し氏は多年中央官界にゐた關係上時勢を洞察して最初は政友會に身を投じたのであつた。恐くはこれは氏の當時の事情が然らしめたのであらう。茲で話を轉じて氏は無事會長に推れてゐた櫻山同志會のことを少しく書くことにする。

熊本縣の櫻山同志會といふのは、あの明治九年十月に大田黒、加屋の兩先輩を首領と仰いで藩士百二十有三名が敬神黨又は神風連と稱して時の政府に反抗して起ち一舉空しく敗れた所謂同志の節に殉じた人々を後世に傳へ、且つ慰靈するの會である。幕末に當つて内憂外患交々至つて國歩艱難を極めた際、四方有志の徒は慨然起つて尊攘の大義を唱へ相與に狂瀾に身を投じて具に辛酸を嘗めて或るは中途國難に殞れたものも少くなかつたが、熊本藩の同志も亦この中に在つて幸に萬死一生を獲て克く明治維新回天の大業を翼賛し奉つたのであつた。然るに皇政維新後對外方針が俄に改るに及んで、他藩の勤王の諸士は進んで朝官に任ぜられて新政に參與するに拘らず、熊本藩の同志は多く退いて廟謨を是とせず常に外交の不振を憤つて國風の改廢を憤慨して憂悶にその日を送り、これが回復を神祇に祈るを以て務めとしてゐたから世はこれを呼んで敬神黨又は神風連と稱したのである。この連中が不平勃發して反亂したのである。然しこれを觀察したらこれ等の連中は頑固であつて

時勢を知らず、亦その行動から見れば顛逆を誤つたと謂はねばならぬが、一片君を思ひ國を憂ふるの精神に至つては忠純熱烈身を殺し家を捨て、尙ほ悔ひなかつたのである。これは只だ求むる所あるのではなく唯道を信する固き信念と義を取るに急なる爲に外ならなかつたのである。更ればこそ大正癸亥の春東宮殿下恐くも慶典を行はせらるゝに當つて特に勅して嘗てその反亂の首領であつた大田黒、加屋兩氏に各正五位を贈り積年勤王の勤勞を追賞あらせられたのであつた。櫻山同志會はこの様な志士の靈を永久に祭る會であつて其の傍記念館の建設肥後勤王の遺物展覽會、記念大講演會開催、肥後勤王諸遺蹟標石建設等各種の記念事業を計畫してゐたが、小橋氏は推れて多年同會の會長となつて種々奔走する所があつたのである。

小橋氏は亦大正十五年二月に日本評論社から農村自治と題する一書を刊行してゐる。本書に説く所は第一編に於て農村問題發生の原因を論じ、第二編から第七編迄は之が解決の方策を闡明して地方自治の社會化に言及し、更に第八

編に於て現代世相の一端と地方自治の轉機に及び努めて平易簡明に卒直に讀者の理解を求めんことに意を用ゐてゐる。本書の特徴は凡て制度の適否と地方の實情とに基きて叙述し敢て泰西の事例を偏用することなく、又は學術的研究に依倚するところはない。全く我國農村の眞髓に立脚して國運の伸暢に伴ひ社會の變轉國民の思潮に順ひて實行し得べく、又其成果を見るべしと信する所を述べたものであるが、本書は今尙實際的に農村振興の重任を負ふ人々に向ては實に裨益する所は多大であると筆者は思ふのである。

實は本書の著述に付ては小橋氏は相談相手として筆者の畏友平井良成氏と協議してゐる。平井氏は小橋氏の依囑を受けて殆んど毎日のやうに小橋氏と會見してその編纂方法、骨組調査執筆等に當つたのは當時筆者も熟知する所であるが、兎に角小橋氏がこの企てをなしたことは大に可とすべきである。

夫れから筆のついでに茲で一寸書いて置きたいのは、小橋氏を中心とした香風會と十日會のことである。香風會は

大正十二年十二月に著書農村自治が出来上つたので、嘗て氏が内務省にゐた際その下僚であつて殊に本書發行に多大の努力した平井良成、矢田増治郎兩氏の慰勞と本書發行の披露を兼ねて鎌倉雪の下なる一料亭香風園で一集會を催したことがある。地方土木衛生の各局關係者五十嵐鑛三郎、森象三、平井良成、矢田増治郎、紀本三次郎、佐々木光綱、日々野貞恭氏等十數名集つて氏を中心として一層親睦を厚ふすることにしたのである。この美しき會合は氏の逝去する迄大抵毎年四、五回位開かれてゐて、これも氏の徳望の結果である。又十日會は氏の郷里熊本縣出身の在京者等が集つて氏が最初衆議院議員に當選したのでを祝したに始まつて氏を中心として出来た會合でもあり又相互の交際機關でもある。これも亦氏の人格が然らしめた所であらう。氏はその外に肥後煥學會の理事として熊本縣出身青年の薫陶に興味を持ち夫々世話を焼く所は多かつたが、郷里の父兄諸氏の感謝する所であつた。

茲に話は轉ずるが、氏の一生一涯の打撃と云へば、例ひ後

日白日青天の身とはなつたと云へ越鐵事件及山手急行事件に連坐したことである。世間ではこの事件の爲めに氏の人格を疑ふてゐるものは今尙筆者の耳にする所である。この越鐵事件といふのは昭和四年濱口内閣の時起つた大事件であつて、同年三月に越後鐵道會社常務取締役久須美東馬氏が背任罪の嫌疑を以て新潟地方裁判所に喚問されたのに端を發してゐる。その時久須美氏は加藤高明氏を始め多數の人々に巨額の金員を援助した旨を陳述したのである。同檢事局では其關係があまりに多人數であり亦金額も莫大に達してゐるので事件が擴大しては事面倒とでも思つたのか之を不問に附したのであつた。この事を耳にした辨護士一又安平氏は久須美氏さへ追究すれば屹度何かの材料が擧がると思ふて同年十一月廿五日に東京地方裁判所檢事局に同氏を告發したのであつた。夫れ等の訊問調書に現はれたのは主として佐竹三吾氏が越鐵買収法案通過に骨折つたこと及その謝禮に關する事等であつたが、久須美氏は強い檢事の追究に佐竹氏に渡した金が氏に交付されてゐたと云つた

のである。檢事は得たりや應と之を取上げて茲に事件は小橋氏にも波及したのである。山手鐵道事件の方は昭和四年十一月二十三日山手急行電鐵會社の太田一平氏と小橋氏の縁戚に當る一條文人氏とが突如警視廳に召喚されて續いて其儘收容されたのであるが、佐竹氏が鐵道政務次官當時山手急行電鐵の敷設免許があり、其後佐竹氏は一萬株を引受けたのは小橋氏と共謀關係にあるといふのである。そうして昭和四年十一月には久須美氏が強制處分に附せられ取調べの進むに従ひ都下の大新聞は筆を揃へて書き立てたものである。次いで佐竹氏の收容を見るに至つたのであるが、同年十一月十九日に至つて東京地方裁判所檢事局は小橋氏に對し電話を以て廿一日に出頭するやう通知したのである。丁度その前後小橋氏は濱口内閣の文部大臣として大演習陪觀のために水戸市に滞在在中であつたが、問題が重大化すると共に水戸から廿一日の緊急閣議に列席のため急遽歸京したのであつた。世間は此問題をより以上に大きく見てゐたことは當時の事實であつた。現に其頃井上藏相が小橋

氏のことは左程問題になるまいと云ふに對して、濱口首相は「越鐵問題のみなればよいが山手問題もあるから困る」と云ひ又山本達雄男からも小橋氏に對して、「濱口首相は君の事を心配して早く不起訴の決定をなさするやう最も公正なる〇〇〇に調書を内々調べさせたが、當初は格別問題にはならず山手問題の如きは殆んど問題とすべき點なしと云つてゐたが、然るに月末頃に至つて〇〇〇が又々山手事件が君の爲に最も不利だと云つて困つて居るさうである」とのことであつた。然し小橋氏は無罪であると強き確信を持つてゐたが、文教の府に長として世上の疑惑を生んだのは相濟まぬ次第であるとの責任感念からして同年十一月廿九日の薄暮に至つて文部大臣の辭表を濱口首相の手許迄提出して骸骨を乞ふて直ちに下野したのである。兎も角氏は意外にも一審に於て有罪の判決を受けたが、公明なる裁判は二審に於て無罪となつた。斯くて一時世間の耳目を惹いて泰山は鳴動したけれども鼠も出ずに小橋氏は何等犯罪に關係なかつたことは立證されたのであつた。千古の哲

人ソクラテスすら無實の罪に問はれて毒死の刑に處せられたのであることを思へば氏も亦腹が立たなかつたであらう。

小橋氏は此の事件以來政黨とは斷然手を切つて暫らく茅ヶ崎の別荘で悠々自適してゐたが、天はかゝる人物をしてこのまゝに朽ちせしめずして昭和十三年に牛塚虎太郎氏が任期満了を以て東京市長を退くに當つてその後任に氏は東京市長として市民の推薦を受けその職に就たのである。氏は市長に就任すると戰時體制としての市民の心を益々緊張せしめ、出征軍人の遺家族や傷病兵の慰問等に渾身の努力をなし、亦市政の刷新にも相當努力してゐたが、豫算説明中市會の委員室にて倒れ其後恢復はかばかしくらず曠職の責任を免がれたために市長の職を辭し再び茅ヶ崎の別荘に専心靜養に勉めてゐたが、遂に昭和十四年十月二日午前三時二十三分に一家眷屬に取り囲まれながら眠るが如く永眠したのは全く惜むべきである。筆者は謹んで哀悼の念を禁じ得ない。氏の傳に付ては筆者としては尙書くべき澤山の

ものがあるが、頁にも限りがあるから大體これ位にして撰筆することにするが、最後に一つ書きたいことは氏と筆者との關係である。筆者は氏の恩顧を受けるやうになつたのは、現在三井生命の神戸支店長をしてゐる氏の長男一雄氏が未だ中學の三、四年の頃からである。當時氏は土木局長であつて、筆者は某新聞社の政治部にゐた時の頃からである。夫れ以來時には中斷してゐた時もあるが、氏とは絶へず關係があつて嘗て筆者は全國都市衛生組合聯合會の書記長の時に衛生組合法案の議會上程には氏は市民の衛生向上見の地から非常に努力してくれたのである。思ひ出すが氏が文相就任の當日多くの人が氏の邸に祝の爲めに集まつたが筆者が他に據處なき用件のため參邸出来なかつたが、氏が他から祝に送られた大鯛を態々佐藤と云ふ氏の運轉手を使ひとしてすそ分けと云はれて筆者の宅へ届けてくれたこともある。人は聊かのことでもその心境には深く感銘するものである。亦筆者は氏に隨行して熊本にも數回赴いたこともある。亦他縣にも氏と二人で數回旅行したこともある。あの

阿蘇の雄大なる噴火を望みつゝ氏と阿蘇越へをしたこともあり、亦佐賀から自動車で久留川土堤を十餘里も走つて鳥栖迄行つたこともある。亦或る時は鹿児島に故床次氏を始め氏や瀧正雄、岩切重雄氏等と同伴して赴いたこともある。斯様の次第であるから従つて多少共氏のことには克く知つてゐる人は皆なキリストや釋迦や孔子にあらざる限り多少の缺點もあるが又よい所もある。氏も亦絶対に缺陷のない人とは云はれぬかも知れぬががい處の多い人である。筆者の見る性格は濫情であつて所謂人間味の豊かな人であつた。これは氏の尊父の感化に依つたものである。一言して云へば綺麗な立派な人であつた。剛腹にして横車でも押し徹す所謂英雄型の人ではなかつた。又辯論の人に非らずして實行の部類に屬する人であつた。氏は喫煙はせなかつたが、自から云はれてゐたが酒は若い時から餘程好きと見へて高等學校在學時代から五高の前の居酒屋で一升樽で飲んだことは屢々あつたとのことだが、酒は大酒家と云つてもよい方である。氏の趣味は讀書もあるが建築と庭造りにあつた

やうだ。植木職を指圖してあの石をこゝに据へあの木を何處に植へるなど庭園造りは非常に好きであつたやうである。大崎の自邸の庭を見ても茅ヶ崎の別荘を見ても夫れが窺はれる。夫れから郷黨の若い者の薰陶にも多大の趣味を以て力を盡されてゐた。氏は常に郷土の青年達に
至誠純忠の肥後菊池氏が二十四代五百年の久しき間只一途に、皇基の擁護に全力全能を捧げ而も一族中に變節者を出さざりしは驚歎すべき尊い事實でこれは全く菊池氏が神を崇敬するの信念から出たのである。と語つてゐた。やうに氏は非常に敬神の念の強い人であつた。先づ大體この位にして置くが尙氏が多年内務の中樞部にあつた關係上内務行政には一見識を有してゐた。まだ世に發表せずしに殉じられたが、氏の「遺稿行政機構改善意見書」は讀者諸賢の参考になると思ふが之は後日の機會に譲ることとした。